産官学協働の健幸プロジェクト「ジュビロ飯」に関する一考察

髙橋和子・江間諒一[1)]

A Study on "Jubilo-Meshi," a Health and Wellness Project of Industry-Government-Academia Collaboration

TAKAHASHI Kazuko EMA Ryoichi

Abstract

The purpose of this study was to clarify how "Jubilo-Meshi" (the meaning of " Meshi" is meal in Japanese) , a product of the Health and Wellness Project, came into being and its ripple effects.

The "Jubilo-Meshi" was a collaboration among Iwata City, Shizuoka Sangyo University, Shizuoka Prefectural College of Agriculture, Forestry, and Environmental Science, Jubilo IWATA, the Iwata Chamber of Commerce and Industry, and local businesses, aiming to improve local health and stimulate the economy through food and sports. The "Jubilo-Meshi" was born after one year of discussions starting in 2020. Research methods included organizing project meeting materials and conducting semi-structured interviews with relevant parties.

The followings became clear: (1) the social significance of disseminating "Jubilo-Meshi", (2) improvement of local health and revitalization of the local economy, (3) promotion of physical activity and food education, (4) presentation of a role model for sustainable activities, (5) branding of the university and promotion of research by students and faculty, and (6) induction of public awareness through information dissemination.

The above results indicate that "Jubilo-Meshi" has become a fixture in Iwata City and has spread through the city in various ways, thanks to the fact that Iwata City has become Japan's No. 1 "sports town" image.

キーワード：産官学協働、健幸プロジェクト、ジュビロ飯、持続可能

Keywords： Industry-Government-Academia-Private Collaboration, Health and Wellness Project, Jubilo-Meshi, Sustainable

Ⅰ．研究の背景

1．磐田市の健康・スポーツへの取組

磐田市の人口は17万人で、2つの大学（静岡県立農林環境専門職大学と静岡産業大学）と2つのプロスポーツ団体（ジュビロ磐田・静岡ブルーレヴズ）がある。磐田市は健康づくりの施策「健幸いわた21」(2018～2023年)[註1)],[1]において、5点の基本目標を示している。①健康寿命の延伸と健康格差の縮小、②生活習慣病の発症予防と重症化予防の徹底、③社会生活を営むために必要な機能の維持及び向上、④健康を支え守るための社会的環境の整備、⑤栄養・食生活、身体活動・運動、休養、飲酒、喫煙及び歯と口腔の健康に関する生活習慣及び社会環境の改善、である。

更に「磐田市スポーツ推進計画」[2]（2016～2025年）を策定し、2021年4月には中間見直しを行った。目指す姿として「年齢や性別、障がい等を問わず市民一人ひとりが、関心、適性等に応じてスポーツに参画できる環

1）静岡産業大学スポーツ科学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572－1

1）*Faculty of Sport Science, Shizuoka Sangyo University*
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

境の整備」を行い、2025年のスポーツ実施率（20分以上のスポーツを1週間に1回以上行う成人の割合）を60%以上にすることを目標に掲げている。しかし、2020年時点でのスポーツ実施率は51%であり、この数値を向上させるには、団体や大学との連携が鍵になる[3]と言われている。そのような中、磐田市は2019年「スポーツのまち」のイメージ日本一に選ばれており、磐田市体育協会出身の草地博昭磐田市長（2021年～）が就任したことから、益々スポーツ振興にも力点が置かれている。

静岡産業大学（以下、本学）は、県民大学宣言において「静岡県に貢献する人材を育成する」ことを目途とし、2021年開設したスポーツ科学部では「スポーツが持つ多様な価値を地域社会、ビジネスに生かせる人材を育成する」ことを掲げている。そして、「地元自治体・企業・高校の皆様と連携して進めたい地方創生」の一つとして、「健康増進講座」を開講し、「市民の健康増進」「活躍生きがい創出」を希求してきた。

以上のように、健康寿命の延伸や生活習慣（スポーツ実施）の課題について、磐田市健康福祉部健康増進課は「健幸いわた21」で、磐田市自治市民部スポーツ振興課は「磐田市スポーツ推進計画」で、本学スポーツ科学部も地域貢献の視点から問題解決に迫ろうとしている。しかし、官学連携が一丸となった取組はなされていなかった。

２．全国の健康・スポーツへの取組

磐田市をはじめ多くの自治体[4]も、健康寿命延伸の為の3要素に「運動・食生活・社会参加」を掲げている。

スポーツ庁は、「スポーツによる地域活性化推進事業（スポーツを通じた健康長寿社会などの創成）」を推進し、全国の21事例を紹介している[註2),5]。これらの事業は行政が単独に実施している場合が多く、研究機関などとの連携をどう図るかが課題になっている。東京オリ・パラ大会も終わりスポーツ庁は「第3期スポーツ基本計画」[6]（2022-2026年度）を出した。第2期（2017-2021年度：第2期作成には本研究の筆頭著者も関わった）の総括として挙げられた「スポーツそのものが有する価値」「スポーツが社会活性化等に寄与する価値（スポーツを通じた地域活性化、健康増進による健康長寿社会の実現、経済発展、国際理解の促進）」を、第3期は更に高めるとしている。その実現の為に「総合的かつ計画的に取り組む12の施策」（2022～2026年度）を出している。その中の5つ目には「スポーツによる健康増進」（健康増進に資するスポーツに関する研究の充実・調査研究成果の利用促進、医療・介護や企業・保険者との連携強化等）、7つ目には「スポーツによる地方創生、まちづくり」をあげている[註3)]。

３．健康に着目した産官学連携の取組

産官学連携で成果をあげた事例が、厚生労働省アクティブガイド「プラス・テン（今より10分多くからだを動かそう）」[7]を基にした、神奈川県の「ふじさわプラス・テン」[8]である。これは2013年より慶応義塾大学健康マネジメント研究科が中心となり、行政（藤沢市各課、市民センター、市内公益財団法人）、医療・福祉（医師会、薬剤師会、地域包括支援センター、社会福祉協議会）、住民（自治会、サークル、老人クラブ等）、民間（NPO法人、郵便局、商店街、スーパー、ドラッグストア等）が一丸となり取り組んだ例である。主対象とした高齢者の身体活動時間は、5年後に増加し実践の成果が検証されている。

また、『産官学連携ジャーナル』「特集短期大学」には、4短期大学の食品開発の事例が紹介されている[9]。松山東雲短期大学食物栄養学科の田中洋子氏の報告では、「栄養士の卵“しののめベジガール”の挑戦」。鹿児島女子短期大学の寺師睦美氏の報告では「地元企業との連携による商品開発への取り組み」。愛国学園短期大学平尾和子学長の報告では「産学連携：いざっ！カレー部頂上決戦」。小田原短期大学宮川萬寿美乳幼児研究所所長の報告では「“みんなが知っている元気なおだだん”を地域に発信」等がある。これらは研究室（教員・ゼミ生）と地元企業が連携してメニューや商品開発を行い、地域の活性化に寄与しているが、産官学連携の取組は少ない。

文部科学省[10]は地域の大学を取り巻く現状の課題として、「若者にとって地域の大学に魅力がない」「産業構造の転換に地域の大学が貢献できていない」等を指摘している。大学の強みや特色を伸ばす事業間の連携や大学改革と連動した研究環境改善の推進、人材育成や産学官連携を通じた社会課題の解決をはかり地域貢献を提唱している[註4)]。

このように急速に高齢化が進む我が国において、健康寿命の延伸は急務であり、磐田市関連団体（磐田市役所、静岡産業大学、静岡県立農林環境専門職大学、磐田商工会議所、ジュビロ磐田、市内企業）は、産官学協働の健幸プロジェクトにより、食とスポーツをテーマにした「ジュビロ飯」を誕生させた。SNSの普及に伴い、食や運動・健康に関する情報が氾濫する現代社会において、プロサッカーチームである「ジュビロ」の名前を冠して食事メニューの提案や運動・健康に関する情報発信を行うことは、健康に寄与する食事内容や運動を理解してもらう上で大きな波及効果を持つことが期待できる。加えて、産官学が協働することで地域経済への貢献が期待できる点も、本取組を持続可能なものとしていく為に欠かせない視点であるといえる。

4. 研究目的

そこで、本研究では、この「ジュビロ飯」誕生までの経緯と波及効果について明らかにすることを研究目的として、次のような3つの下位目的が設定された。

①「ジュビロ飯」誕生の背景にある社会的背景を示すことで「ジュビロ飯」の社会的意義を示すこと

②「ジュビロ飯」誕生の経緯を示すことで同様の取組を普及する上でのロールモデルとなること

③今後予想される波及効果や課題について考察を行うこと

5. 定義「産官学協働」

通常、「産官学連携」は「産業界（民間企業）」「学術機関（大学などの教育機関）」「官公庁（政府や地方公共団体）」をまとめて表現する語である。経済産業省は「産官学連携」を、文部科学省は「産学官連携」を多く使用する。健幸プロジェクトでは「連携」と言っていたが、本稿では協力して活動する意図から「協働」を使い、「産官学協働」という語を使用する。「ジュビロ飯」の定義は、「Ⅲ. 結果と考察」で後述する。

Ⅱ. 研究方法

健幸プロジェクトによる「ジュビロ飯」誕生までの経緯、波及効果、今後の挑戦等について、プロジェクトに関する資料の収集・整理を行い、これらを時系列に整理した。さらに、各団体の担当者11名への半構造面接を行い、「ジュビロ飯」への取組の共通点や、それらの背景にある要因を検討した。半構造面接の内容の共通点を探る為には、テキストマイニング分析を行った。

1. 資料収集

1）プロジェクト会議資料

2）メール等の交信記録

3）プレスリリースによる発信（SNS含む）

2. 半構造面接

1）対象：磐田市役所（健康福祉部健康増進課2名・自治市民部スポーツ振興課2名・経済産業部産業政策課2名）、静岡産業大学（総務課1名・教員1名・学生1名）、静岡県立農林環境専門職大学（教員1名）、磐田商工会議所1名。なお、産業政策課がジュビロ磐田への交渉（ジュビロ飯の命名やロゴ使用権、運動メニューの実施等）をすべて行った関係から、ジュビロ磐田との協働については、産業政策課に聞き取りを行った。対象者には事前に本研究の目的を電話やメールで示し、協力頂ける方に聞き取り調査を行った。

2）方法：本研究の筆頭著者が2022年5～6月にかけて、直接聞き取りを行い、発言を文字化した。共通の質問項目は、①健幸プロジェクト「ジュビロ飯」の経緯をどう捉えているか、②参加して良かったこと・困ったこと、③波及効果、④今後の課題や挑戦、等である。

Ⅲ．結果と考察

1.「ジュビロ飯」誕生までの経緯

プロジェクト会議や各団体間の開催について、聞き取り調査やメール交信メモ（メール交信は72回に及ぶ）から、「ジュビロ飯」誕生までの経緯を表にまとめた（表1）。これを見ると、最初の頃のプロジェクト会議は月一回のペースで開催している。資料を時系列にみると、第10回産業フェア（2020/11/13）を皮切りに、4区分できる。Ⅰ～Ⅳ期の詳細をみていく。

なお、通常、協働で何かを始める時には主宰者がおり、何をいつまでに行うかの目標が示されることが多い。今回のプロジェクトはパネル討論会開催主催者である磐田商工会議所が、調整係（連絡・会場設定等）を引き受けて始まった。パネラーであった本研究の筆頭著者が進行役（座長）とスポーツ科学部のスポーツ科学の専門家が運動関連の提案を、静岡県立農林環境専門職大学教授が栄養面でのサポートを、「健幸いわた21」を標榜する磐田市の3課が企業との対応なども含め実質の推進役を務めた。検討会を重ねるうちに検討会の名称は「健幸プロジェクト」に決まり、その具体的な産物を「ジュビロ飯」と名付けることも、途中から決まっていった。

表1　「ジュビロ飯」誕生の経緯

期	年	月日	内容
Ⅰ	2020年	11月13日	第10回産業振興フェアinいわた パネル討論会「健康・食・スポーツで地域貢献」
		12月17日	第1回検討会　連携可能なテーマ検討
	2021年	1月14日	第2回検討会　ワークショップ「スポーツ＋食⇒健幸（健康）」
		2月9日	第3回検討会　磐田市産業政策課メンバーになる
		3月25日	第4回検討会　ジュビロ飯の企画提案
Ⅱ		4月24日	第5回検討会　11月12日ジュビロ飯完成計画立案
		4月24日	SSUS　PRESS RELEASE　11月ジュビロ飯販売計画
		5月13日	市3課と本学部事前検討会　産官学民協働プロジェクト設立
		5月21日	第6回　「検討会」を「プロジェクトミーティング」に改名
		7月21日	第7回プロジェクトミーティング
		8月25日	市(スポーツ振興課)へ運動情報の提供
		9月28日	第8回プロジェクトミーティング（ジュビロ飯に関わる相談内容）
Ⅲ		10月28日	キックオフイベント　農環大学食でのジュビロ飯お披露目会
		11月1日	第9回プロジェクトミーティング　産業フェア出展の情報共有
		11月12日	第11回産業振興フェアinいわた　ブース出展　「勝つ丼」展示
		11月20日	ららぽーと磐田健康プロジェクトPRパネル設置
		11月22日	市(スポーツ振興課)と本学部との運動レシピ検討
		12月2日	「ジュビロ飯」認定による健幸の取組実施要綱完成
		12月5日	ジュビロ磐田「最終節」ヤマハスタジアムでのジュビロ飯販売
	2022年	1月20日	市(産業政策課、健康増進課、農林水産課)と本学食堂ヤタローと検討
		1月24日	市(スポーツ振興課)へ運動情報の提供
Ⅳ		2月23日	スポーツのまちNo.1記念シンポジウムシンポジスト
		2月26日	J1開幕エコパスタジアムでのジュビロ飯販売
		2月28日	第10回プロジェクトミーティング　活動報告と今後の計画
		3月14日	学生と市職員の意見交換：市長・市職員に向けて学生がプレゼン
		3月中	磐田キャンパス食堂に導入する「ジュビロ飯」メニューの決定
		3月28日	磐田市　スポーツプラットフォーム準備会
		4月19日	静岡産業大学磐田キャンパスジュビロ飯お披露目会

＊静岡産業大学が直接的に関与したものを中心に掲載した

このように、やっていくうちに協力者の役割も自ずから決まっていき、主体的に各人が動いたと言える。磐田市もこれまでの縦割り行政から、プロジェクトを達成する為に課を超えて始動した結果、産官学が初めて協働して行った画期的なプロジェクトになった。

Ⅰ期　パネル討論会開催～
Ⅱ期　健幸プロジェクト発足～
Ⅲ期「ジュビロ飯」誕生お披露目～
Ⅳ期　各団体の独自の活動推進～

1）Ⅰ期　産業振興フェアのパネル討論会「食＋スポーツ⇒健幸」からのスタート

磐田商工会議所等が主催の「第10回産業振興フェアinいわた」(2020/11/13)において、「健康・食・スポーツで地域貢献」のパネル討論会が開催された。パネラーは鈴木滋彦静岡県立農林環境専門職大学学長、髙橋和子静岡産業大学教授らであった。髙橋は第2期スポーツ基本計画作成に関わったことから、スポーツで社会を変える重要な課題として「共生社会や健康長寿社会実現、経済や地域活性化」について話した。具体的には、次のような話であった。静岡産業大学はこれまでも、磐田市自治市民部スポーツ振興課や健康福祉部健康増進課と協力した「健康教室」や地域連携を推進する「いわた総合スポーツクラブ」「杏林堂との健康セミナー」を開催してきたこと。2021年4月に開設される静岡産業大学スポーツ科学部（以下、本学部）は、静岡県に初めて開設されるスポーツ系学部であり「健康づくり」を一つの柱に掲げていること。これからのスポーツや本学部に期待されることは「健康・well-being（幸福）」「主体的に協働してかかわる」「活動結果や成果を表す」「地域貢献」「スポーツツーリズム」などであった。

この産業振興フェアでのパネル討論会を受け、一過性のイベントではなく産官学協働で「食＋スポーツ」を中心とした継続的な取り組みを希求し、本学部と磐田市（健康増進課・スポーツ振興課）、商工会議所のメンバーで連携会議をスタートさせた。

1回目（2020/12/17）の検討会では、「健康野菜を広める」「健康経営を広める」「大池健康ツアー（本学での運動体験＋地産地消の食事）」など、連携して行う取組案がいくつか出された。特に健康増進課の課題として、若者の野菜離れが進んでいることを受け、本学では女子学生の野菜摂取の現状把握の調査や、静岡県立農林環境専門職大学と連携した野菜販売「SSUマルシェ：野菜の気持ち」企画の検討も行った。このように、「スポーツ・食・健康」をキーワードとして、志を同じくする方々と共に行動する機運が高まったが、具体的な絞り込みには至らなかった。

そこで、参加者を広げ様々なアイデアを募るためワークショップ形式で高橋がコーディネーターを務め、2回目（2021/1/14）の検討会を行った。ここには2大学の学生や教員（米の研究者、スポーツ科学者、カウンセラー）、磐田市（健康増進課・スポーツ振興課）に産業政策課も加わり、18歳から79歳までの老若男女の混合チームにより、磐田市民の健康を願う様々な企画案が出された。参加した学生にとって、年齢も職業も異なる幅広い方々と意見を自由に出し合えたことについて「よい刺激と学びの場を頂き感謝しています」との感想が寄せられた。

この企画を新聞社にプレスリリースして活動の広報化にも努めるようにした。このように、関係者はプロジェクト全体を通して「見える化」を図ることも重視した。

ワークショップで出された様々な案を検討した結果、産官学協働のプロジェクトとして、地域の産品を活用した健康レシピ（ジュビロ飯の原型）を提案することとなった。この会から産業政策課が加わったことにより、プロジェクトの方向性が明確化し進行速度が速まった。産業政策課が途中参加した理由について、担当者は聞き取りで、次のように語っている。「産業政策課では、市内に誘致した次世代農業事業者などの企業と他の市内企業のほか、団体や市民等との連携を図ることで、新たな産業の創出や起業、特産品の開発等により、地域振興、地域の活性化に向けて、検討・研究を進めてきた。そうした中、

ジュビロ磐田や地域企業との連携を模索していたところ、「健幸プロジェクト」の取組を知り、そのビジョンに共通点が多かったことから、産業政策課として当該プロジェクトに参加させて頂くことになった」という。第3回の検討会（2021/2/9）において、改めて具体的な取組の検討を行った。第4回の検討会（2021/3/25）では、磐田市の3課（健康増進課・スポーツ振興課・産業政策課）は事前に調整のうえ、「ジュビロ飯」の企画提案がなされた。ここに至るには、産業政策課がジュビロ磐田と交渉し、協力体制を構築しネーミングの許可もすでに得ていた。

以上みてきたように、I期は産業振興フェアのパネル討論会におけるテーマ「食＋スポーツ⇒健幸」から、「健幸いわた21」の課題に対し、主として産学連携での取組が開始されたと言える。磐田市の縦割り行政からの脱却は、まだ図られなかったと言える。

2）II期　健幸プロジェクト発足

第5回の検討会（2021/4/24）において、メンバー（2大学、商工会議所）の賛同を得て、プレスリリースも行いながら、第11回産業振興フェアinいわた（2021/11/12）を短期のゴールとして、「ジュビロ飯」の定義づくりも含めスタートすることとなった。定義づくりは、各専門家が提示し、メンバーで検討して決めていった。「食材」の選定に関しては、市の健康増進課と栄養学を専門とする静岡県立農林環境専門職大学教授が担当した。「身体活動」の提案は、市のスポーツ振興課と静岡産業大学のスポーツ科学の専門家が担当した。ジュビロ磐田やレストランとの交渉は、市の産業政策課が主となり、磐田商工会議所がサポートする形で行った。特に、スポーツ科学の専門家と市3課は合同事前打ち合わせ会（2021/5/13）を行い、連携を強めた。このことにより、産学の協働で始まった検討会は、文字通り磐田市初の産官学協働プロジェクトになった。

第6回（2021/5/21）からは「検討会」も「プロジェクトミーティング」と改名したことにより、プロジェクトの目的の明確化が図られた。第7回（2021/7/21）を終えると、「スポーツ振興課・静岡産業大学」（2021/8/25）との運動情報の詰め等、各団体間における協働作業が活発化していった。第8回（2021/9/28）では、「ジュビロ飯」に係る内容の詰め（ロゴマーク・チラシ・のぼり・認定スキームの作成）を確認し、10/28日のキックオフイベント試食会に向けて、各団体が準備してきた情報を共有した。それは極めて具体的であり、イベントの広報・磐田市のHP「ジュビロ飯」作成・運動コンテンツの作成（ガッツポーズスクワット）・ジュビロ飯申請ルールの設定等、多岐に渡る内容であった。「ジュビロ飯」試食会の報道用資料を掲載する（図1）。

電車に例えれば、第I期は各駅停車の様であったが、第II期は新幹線の様にスピーディーに進んだ。「ジュビロ飯」の定義やメリット、健幸プロジェクトの目的は、紆余曲折を経て、次のように設定された。

【「ジュビロ飯」の定義】

「健康づくりに役立つ栄養バランスのとれた食事と日常生活の中で適度な運動をすること」

【「ジュビロ飯」の特徴】

①1食で主食、主菜、副菜が揃っている。筋力アップの為、たんぱく質と食物繊維が豊富なメニューであること。

②魚やきのこ等、ビタミンDを豊富に含む食材を使用する。ビタミンDは骨や筋肉の形成を助け丈夫な身体づくりに役立つ。

③磐田の地場産物を1品以上使用する。地産地消がSDGsの達成に貢献する。

④「食事は野菜から食べ始めること」の情報を提供する。ベジファーストによって、血糖値の急上昇を抑え、糖尿病などの生活習慣病予防につながる。

⑤運動に関する情報提供をする。市民がスポーツ・運動をするきっかけづくりにつなげる。なお、食事メニューの基準は厚生労働省の「生活習慣業予防その他の健康増進を目的として提供する食事の目安」や指針（スマートミール）を参照して設定している。加えて、②のビタミンDへの着目は、

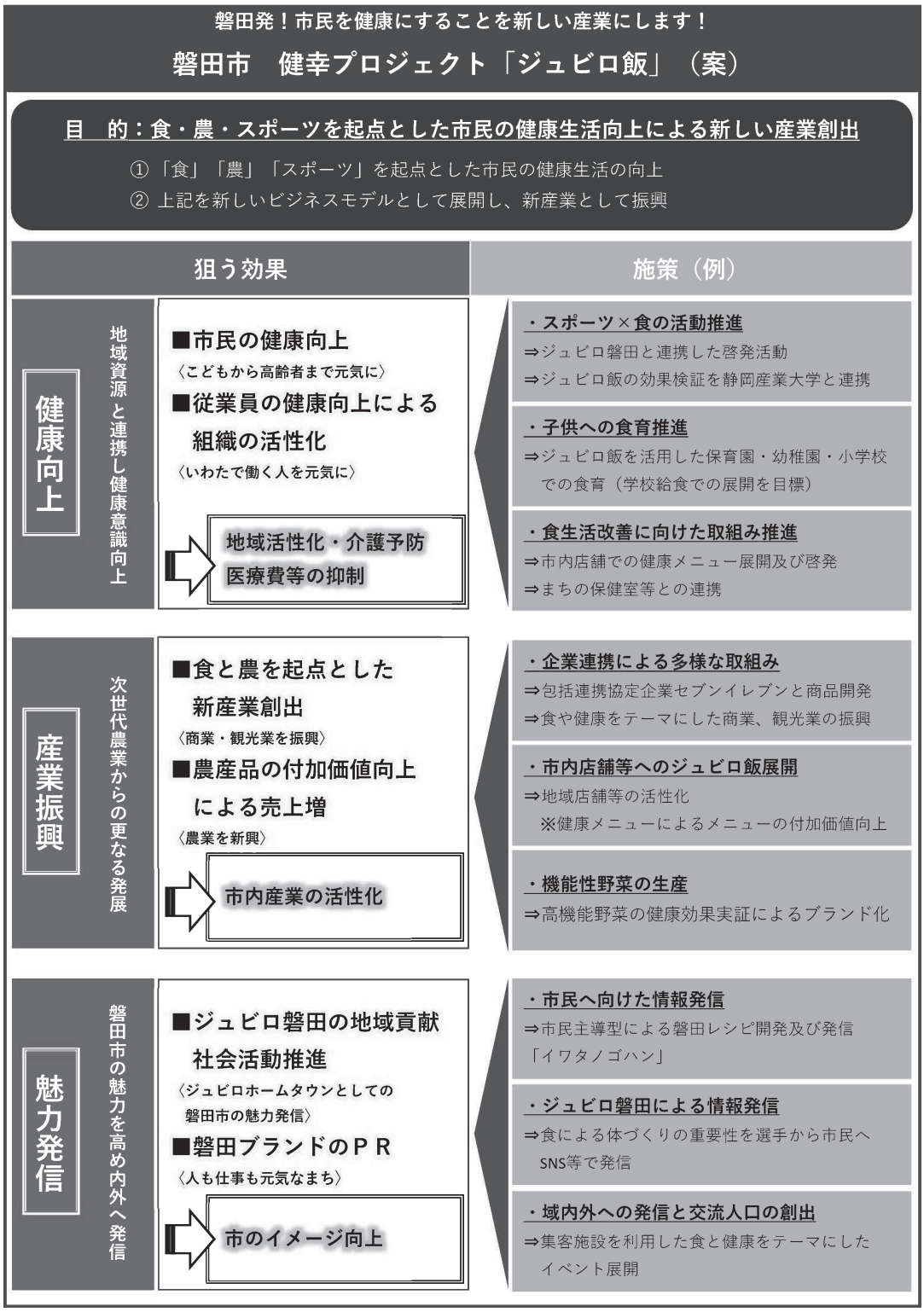

図１　「ジュビロ飯」試食会報道用資料

本学部のスポーツ科学の専門家による発案であり、他の類似プロジェクトと比較して特徴的であると言える。ビタミンＤは食事による摂取に加えて、日光にあたることで作られる。COVID-19 感染拡大に伴う外出自粛により、ビタミンＤ不足が懸念されており、コロナ禍で進められたプロジェクトとして、ビタミンＤへ言及したことは意義があったと考えている。

【健幸プロジェクトの目的】

①健康課題の解決（フレイル予防）
②運動習慣の改善（スポーツ実施率の向上）
③地域経済活性化及び新産業創出

以上みてきたように、II 期は健幸プロジェクトの発足や「ジュビロ飯」試食会という短期の目標が設定されたことにより、縦割り行政の役割分担ではなく、プロジェクト遂行の為に産官学協働作業が一気に加速したと言える。

3）III 期　「ジュビロ飯」誕生

プロジェクトがスタートした約１年後を目途にした、キックオフイベント「ジュビロ飯」試食会のお披露目会（2021/10/28）（図２）が、新設間もない静岡県立農林環境専門職大学食堂で開催できた。草地博昭磐田市長と同市のマスコット「しっぺい」、小野勝ジュビロ磐田社長と同社のマスコット「ジュビロくん」、高橋和子静岡産業大学スポーツ科学部長、同学部江間諒一准教授および２名の学生、前田節子静岡県立農林環境専門職大学教授、井口同事務局長および２名の学生達がそろい踏みした。その様子は報道各社（テレビや新聞）に報道されたことにより、「ジュビロ飯」はレストランや磐田市民にも少しずつ認知されていった。この段階では、２大学の学生は積極的にプロジェクトに参加したというよりは、プロジェクトメンバーからの誘いに乗ったというレベルであった。

磐田市民に対する健幸プロジェクトの第一弾としての「ジュビロ飯」のお披露目会が成功裏に終わり、関係者は安堵した。しかし、これは終着点ではなく、これがスタートラインであるという共通認識を改めて確認した。今後、各団体は何ができるのかを、走りながら考えていく必要性を同時に感じていた。そんな折に、磐田市は民間調査団体（ブランド総合研究所）の調査により「スポーツのまち日本一」になった。この好機に乗じて、更に「ジュビロ飯」は第二弾に進んでいった。

第９回（2021/11/1）では、「第 11 回産業振興フェア in いわた」（2021/11/12・13）において、各団体が何を行うかの情報共有を行った。磐田市は磐田グランドホテルの「勝つ丼」（図３）を展示し、広報誌いわたの「イワタノゴハン」にそのレシピと、健幸プロジェクト（磐田市の地元２大学を含む産官学民連携による初の事業化）がスタートしたことの概要説明を同誌に掲載した。本学部は、磐田市と静岡県立農林環境専門職大学の展示に隣接したブースで、参加者の健康度測定（骨密度・貧血度が分かる血中ヘモグロビン濃度）を実施すると共に、所属教員 16 名の研究情報を周知した。ただし、以前の計画では、産業振興フェアに出展する約 100 の企業の昼食に「ジュビロ飯」を用意する予定であったが、準備が間に合わず「ジュビロ飯」の広報の機会を失った。

その後、産業政策課は、ららぽーと磐田において「健幸プロジェクト」ジュビロ飯の PR としてパネル設置（2021/11/20 ～ 28）を行った。本学とスポーツ振興課との運動レシピの打合せ（2021/11/22）や、市３課内での検討会を経て「ジュビロ飯認定による健幸の取組実施要綱」（2021/12/2）ができた。

以上みてきたように、III 期は「ジュビロ飯」のお披露目を通して、市民への広報活動（見える化）が一段と進行し短期目標が達成された。その一方、走りながら進めてきたプロジェクトであり、強力なリーダーシップを取る者もいなかったった為、次の目標設定には至らなかった。

図２　キックオフイベントの様子

図３ 磐田グランドホテルによるジュビロ飯メニュー

4）Ⅳ期　各団体の独自の活動推進

その後、各団体が独自に、あるいは連携しつつ、「ジュビロ飯」第二弾に向けて、様々な取組が、次に示すように進行している。ここでの共通点は、プロジェクトの座長が指示を出すこともなく、各団体が必要性に応じた活動をしていることにある。それこそが、今やれる力で持続可能なことを思い思いに実践していると言える。その間、第10回プロジェクトミーティング（2022/2/28）において、各団体から「2021年度健幸プロジェクトの活動報告と今後の計画」についての報告がなされ、次回は2022年9月頃の開催とした。

①磐田市３課・商工会議所・ジュビロ磐田

磐田市の３課は産業政策課が中心になって、次のような様々な活動を展開した。

・セブンイレブンでの2022年秋冬の弁当販売に向けメニュー、並びに磐田市内産物の収穫体験を併せて実施する検討会。
・商工会議所内の部会で市内５事業者への説明後、各事業者での展開調整。
・市内幼稚園保育園での展開トライアルに向けた情報交換。子育てセンターとみがおか（幼保園）認定（2022/4）。
・静岡県FHCa01産学官民連携会議で「健幸プロジェクト」事業発表。
・広報誌いわた「イワタノゴハン」に、磐田グランドホテル「カツ丼」（2021/11）、しおさい竜洋カフェレストランルポ「オレンジライスプレート」レシピ（2022/2）、「静岡産業大学ジュビロ飯:ピンポン入りラグビーつくね」レシピ（2022/5）掲載（図4）。
・ジュビロ磐田「最終節」（2021/12）試合会場で「ジュビロ飯」限定150食を完売。ガッツポーズスクワットをその場で行うと100円引きする等について、市長が記者会見で発表。J1開幕（2022/2）のスタジアム販売について調整。
・ジュビロ飯認定の普及・振興・確保に努める。2021年末は５か所であったのが、今後30か所を目途に拡充。
・ジュビロ磐田は、静岡産業大学でのお披露目会をＪリーグの社会連携「シャレン」ページに掲載した[12]。知名度もあり「いいね！」の反響あり。今回の「ジュビロ飯」プロジェクトを「シャレン！アウォーズ」にエントリーしたが、受賞はできず。

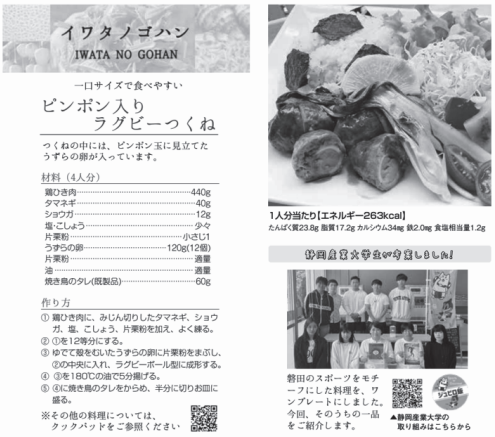

図４　静岡産業大学ジュビロ飯メニューレシピ（広報いわた令和４年５月号30頁 転載許諾済）

②静岡産業大学

静岡産業大学磐田キャンパスにあるスポー

ツ科学部を中心にして、学生（高校生含む）が主体的に「健幸プロジェクト」に関わることにより、磐田市の豊富な資源（産物・環境・スポーツのまちNo1）に気づき、地域貢献が身近にできることを目指した。

・スポーツ科学部入学試験に新たに取り入れた「スポーツプレゼンテーション入試」合格者への入学前サポートの一環として、大学生とのゼミ活動を通して、磐田市長と市職員に向けてのプレゼンテーションを企画（2022/3/14）（図5）。高校生にとっては入学前にスポーツプレゼンテーションの経験を活用。大学生にとっては卒論に直結。新聞報道あり。

図5　磐田市長・市職員に向けた学生によるプレゼンテーション

・「ジュビロ飯」（食＋運動レシピ）を学生と教員と大学食堂ヤタローとで考案。大学と市3課のサポートも受け、磐田キャンパスでのお披露目会を実施（2022/4/19）（図6）[12]。啓発用ランチョンシートを作成し、食事メニュー注文者へ配布、食堂内に掲示（図7）。大学からジュビロ飯一食につき130円の補助を受ける為の交渉（ジュビロ飯は地元野菜を使用する為、他のメニューに比べ高値）。新聞報道・静岡産業大学『newsLETTER』特集に掲載。

・「スポーツのまちNo.1記念シンポジウム」シンポジストとして「ジュビロ飯活動報告」を行い、静岡ブルーレヴズ等への啓発活動に繋げる。

・ジュビロ飯の広報は『大學新聞』（2022/5/10）、『日経MOOK』（2022/6/26）にも掲載。

・産業政策課から「ジュビロ飯活性化に向けたコンテンツ案」、スポーツ振興課から「スポーツ実施率向上を目指した冊子作成案」依頼（2022/5/24）。

・県立磐田農業高校（教員・高校生）との「ジュビロ飯」（レシピ・企画）の連携。

図6　静岡産業大学ジュビロ飯メニューお披露目会の様子

図7　ジュビロ飯啓発用ランチョンシート

③静岡県立農林環境専門職大学

キックオフイベント「ジュビロ飯」のお披露目会（2021/10/28）は、学長・事務局長はじめ、多くの協力体制のもと、大々的に行われたことにより、その波及効果は大きかったと言える。学食でのジュビロ飯提供に関しては、管理栄養士である店長も非常に熱心に関わってくれたおかげで、2022年5月までに4種類出している。今後、一週間に1度のペースでジュビロ飯を食べられるよう、年間で16種類のメニューを考えている。

以上みてきたように、Ⅳ期は各団体が、時には産学連携、時には官学連携、時には産官学民連携など、今やれる力で持続可能な事業を展開している。

5)「ジュビロ飯」誕生の経緯の全体考察

健幸プロジェクト「ジュビロ飯」は、自発的に産官学協働の形で行ったもので、事業計画や予算案もなく、当然、謝金も交通費も派生しておらず、ある意味、ボランティア活動であった。必要経費は各担当が各部署に申請したと思われる。スポーツ庁や経済産業省が健康増進の事業に計上している予算額からすれば、本プロジェクトのような事業は稀有である。つまり、予算がなければできないという発想ではなく、主体的に活動し、必要に応じて連携を図り、無理をせずやれた持続可能な事業と言える。

それを支えていたのは、磐田市民の健康寿命延伸のために、各団体ができることを試行錯誤した結果、「ジュビロ飯」に結実化したと言い換えることができる。

2. 健幸プロジェクト「ジュビロ飯」の波及効果や今後の課題

「ジュビロ飯」誕生までの経緯で触れられなかった点について、各団体への聞き取り（①経緯、②良かったこと・困ったこと、③波及効果、④課題や挑戦したいこと、⑤その他）を、簡単に整理する。特に「5 その他」において、磐田市では各課の独自性や 3 課の連携について、大学教員では大学との連携について、述べられた。

①磐田市健康福祉部健康増進課

健康増進課においては健康課題（生活リズム・生活習慣・食事の重要性等）について、従前から市民に提案してきたが、2020 ～ 2022 年はコロナ禍の対応とも重なった時期であった為、「健幸プロジェクト」に参加できて良かった。ジュビロ飯の定義も学校教育課（学校給食などの視点も含め）も加わり、クリアされたと思う。また、磐田市は縦割り行政であったのが、「健幸プロジェクト」を中心にして、事前に打ち合わせをしながら行えたことは良かったと思う。ただ、産業政策課は「ジュビロ飯」を完成させようという目的が明確であった為、健康増進課の速度とは違っていた。引っ張られた、あるいは、走った感じがする。それは成果を出そうという熱意が高かった為と考えられる。今後、健康福祉課としては「ジュビロ飯」をどのように充実しなければならないかという課題を、もう少しゆっくりと考えて発信していきたい。

今後の健康課題としては「食や運動や休養」が重要であり、これと「ジュビロ飯」をどのように関連付けるのか。ライフステージに応じた運動（例えば 100 歳体操・フレイル予防等）や健康を考える場合、「ジュビロ飯」だけでは不安があるし、健幸プロジェクトの企画立案には健康増進課だけでは限界があることを、今回の健幸プロジェクトに参加して、より実感した。例えば、子どもたちの食事がめちゃくちゃな現状を打破するために、「浜松ウェルネスプロジェクト」のように高校生に栄養士が指導するような、入り口と出口が明確になるようなプロジェクトが望ましいと考えている。

②産業政策課

「ジュビロ飯」は、磐田市初の産学官連携の健幸プロジェクト第 1 弾として取り組んだものである。現在、世界的な食料供給不足や国内における人口減少、少子高齢化の急激な進展、それに伴う「医療費や介護費用の増大」など、多くの自治体が同じ課題に直面し、課題解決に向けて取り組みを進めている。磐田市では、健幸プロジェクトを中心に、そのビジョンである「食、スポーツ、健康で地域貢献」を目指し、関係機関と連携しながら、現行の「ジュビロ飯」の更なる振興と新たな展開を模索していく。その意味では、スタートラインについたばかりである為、「ジュビロ飯」のお披露目ができ、各レストランに波及しても達成感はないのが本音である。また、健康増進課やスポーツ振興課は目の前の市民の要求に応えるのが職務だとすれば、産業振興課は、磐田市の将来を見据えて夢を描くことや、産業界と連携する為、速度が速いのは当然であると、他課との違いを改めて認識した。

③スポーツ振興課

静岡産業大学と連携し、市のHP上で、家事や仕事をしながら実施できる「ながら運動」の情報提供を行った。磐田市民のスポーツ実施率向上を目指しているが、情報提供が適切に機能しているかどうか、今後の検証が必要だと考えている。また、磐田市が「スポーツのまちNo.1」になったのを機に、スポーツプラットフォーム準備会（2022/3/28、6/27）を開催した。キーパースンは、磐田市長、ジュビロ磐田社長、静岡ブルーレヴズ社長、静岡産業大学スポーツ科学部長であった。これを皮切りに、健幸プロジェクトとも連携を図り、磐田市のスポーツを盛り上げていきたい。

④静岡産業大学

本学は地域貢献を重視する大学である。その為、今回のプロジェクトにおいても、磐田市長と市職員に向けてのプレゼンテーション企画（2022/3/14）や、本学での「ジュビロ飯」お披露目会（2022/4/19）イベント等においても、地元企業を巻き込むような形（共同実施）を取り、大学の資源（人・もの・こと）を提供してきた。このことにより、入試広報のブランディングにも大きく機能し、学生や教職員への周知が図られ、教員の研究領域やネットワークを広げることができた。これらの方針は今後も踏襲したい。例えば、市や民間主導のプロジェクト関連イベント等への学生の参画を積極的に推進する。学生にとってはこのようなボランティアやインターンシップ（単位化を見据えて）活動が、「主体的で対話的で深い学び」に繋がる契機になると考えている。特にスポーツ科学部の学生は、「スポーツ・身体活動・健康」に関する情報媒体の共同制作（SNS, 情報誌、ウォーキングマップ等）を通して他者（高校生や市職員等）と関わることは、「理論と実践の架橋」になり、それこそが本学の特徴の実学教育だと言える。

特に、教員にとっては各専門領域の研究推進は当然であるが、本プロジェクトのように他領域への「スポーツ・健康・食」への接近は、「何のために研究するのか」「誰のために役立つ研究活動になるのか」といった研究の原点を、再確認することになった。

⑤静岡県立農林環境専門職大学

静岡県に初の専門職大学であり、1年生は全寮制であるため、学食で3食摂ることになっている。その意味では、「ジュビロ飯」のモットーである「ベジファースト」のパネルが食堂の側面に設置されていて、いつも学生は目にする為にベジファーストになってきたことが嬉しい。また、先日「ジュビロ飯」を認定した居酒屋のように、普通の居酒屋さんが申請するようになったこと。それまでは市が行うことは敷居が高かったのだが、普通の人たちが関わるような気運が醸成されていった。つまり市民に関心を持った人が増えたというのが喜ばしいし、この若い店主はヤマハスタジアムでもジュビロ飯を売りたいアイデアを持っているという。

このプロジェクトが持続可能な事業になったらいいと考えているが、マイナス要素もある。それは、担当者が間もなく定年になること。最初に関わった事務局長はすでに定年になったこと。学食の入札は1年ごとであり、熱心な店長が変わることもあること。学生課の職員は地方公務員であり積極的なサポートを得られないかもしれないこと。「ジュビロ飯」は販売でき、とりあえずスタートはしたが、今後「ジュビロ飯」や健幸プロジェクトは何を目的にしていくのか。各団体の目標をどうすり合わせていくのかが不明であり、それは大変だと思われる。

⑥磐田商工会議所

商工会議所も主催者であった「第10回産業振興フェアinいわた」は、磐田市、大学、商工会議所の各トップが「健康・食・スポーツで地域貢献」をテーマに討論し、それを契機に健幸プロジェクトがスタートし、組織横断的に活動し成果に結びついたことが一番良かった。また、セクショナリズムに陥りがちな市の中堅職員が「目的志向」で活動したこと。各部門の若い人の感性がコラボできたこと。2日間開催の産業振興フェアが、「年間活動に結び付ける場」「次世代に向けた交流の場」「産業と技術革新の基盤作り（SDGs9番目の目標）」になったこと。それらが健幸

プロジェクトで目指す姿と一致していたことが、とりわけ嬉しかった。

「80歳の老ビジネスマン」は初めリーダー役を引き受けていたが、「歳を取るとはこう言うことか」と感じ、途中からブレーキになりそうに思え控え役になった。特に、ワークショップで孫と同年代の学生や市職員と接し、発想の柔軟性にカルチャーショックを受け、年配に気を使って意見を言いにくくなるのを危惧した。長年、「固い感性のビジネス界」に生きてきたので、「柔らかい感性の活動」に参加させて頂き満足した。そして、これまで女性と仕事をする機会はなく、今回の活動で女性は目的志向が強いと感じたことから、世の中で「女性活躍の場」が叫ばれているのだと実感した。

商工会議所は「産・学・官・金」の交差点で流れを良くする役割と考え活動してきたが、これまでは「産・学・官・金」は枕詞で使うだけで、具体的活動は少なかった。その為、今回の活動は多くの情報や異分野との交流で「考える材料」を増やすことができた。商工会議所の若い職員がこのようなプロジェクトに参加できるように働きかけたい。また、近年の「民主導」の考えも結構だが、もう少し「官学」に産業界をリードして頂くのが良いようにも思う。2022年の産業振興フェアでは、プロジェクトを土台に、磐田の特徴を生かした「農福連携（障がい者雇用も含め）」を実践していくつもりである。

⑦「ジュビロ飯」の波及効果や今後の課題についての各団体の共通点

更に各団体への聞き取り内容の共通点を探る為に、テキストマイニング分析を行った（共起ネットワーク分析：最小頻出数5回以上、上位50語）［図8］[13]。その結果、2クラスターから構成され、頻出語は[]の中の抽出語である。1つ目は[連携]を中心に[磐田][産業][振興][スポーツ][健幸]が繋がり、2つ目は[プ

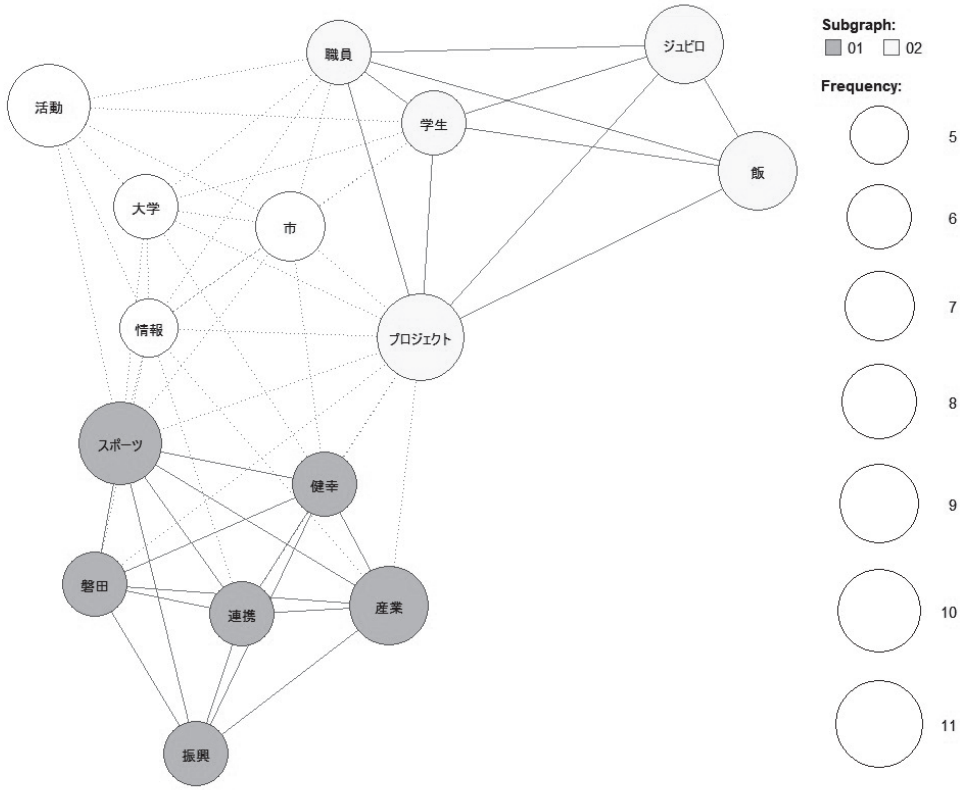

図8　「ジュビロ飯」の半構造化面接の内容

ロジェクト]を中心に[ジュビロ][飯][学生][職員]が繋がり、各クラスターの中心の語である[プロジェクト]と[連携]の語も繋がっていた。このことより、磐田の健康プロジェクト「ジュビロ飯」の共通点は、職員や学生とも連携して、スポーツや産業振興に波及効果をもたらしたと捉えていたと言える。

また、今後の課題を整理してみると、各団体はこのプロジェクトは今後何を目的に、どこに向かって進んでいくのかについて、危惧していることである。そもそものスタートが、磐田市民が健幸になる為に各団体が知恵を集め、行動してきたように、最初から明確な目的に向かって進んできたわけではなく、無理をせず、やりたいことを自主的に進めてきたのだと思う。今後も各団体は、自身の立場から持続可能な活動を実施していくことになると思われる。

産官学協働の営みを通して、ネットワークができたことが一番の産物であったと思われる。とりわけ、コロナ禍で健康を脅かす要素が多く、産業面（飲食店やホテルやスポーツ業界等）においても大打撃があった。そんな中、少しでも「ジュビロ飯」が、健幸プロジェクトとして「食・スポーツ・健康・産業振興」に機能できたとしたら、法外の喜びになったと考える。

3. プレスリリースによる発信（表2）

本プロジェクトに関するプレスリリースは表2に示した通りである。機会あるごとに情報発信し「見える化」を図り、地域住民や企業に届くこともねらいであった。依頼元は磐田市や静岡産業大学が多いことから、この2団体はプロジェクトへの期待や成果が大きかったと伺える。

特に多く掲載されたのは、キックオフイベント「ジュビロ飯」のお披露目会（2021/10/28）。「第11回産業振興フェアinいわた」（2021/11/12・13）での磐田グランドホテルの「勝つ丼」。静岡産業大学学生が磐田市長にスポーツ・健康課題を提案した会（2022/3/14）。静岡産業大学「ジュビロ飯」お披露目会（2022/4/19）であった。その後、静岡産業大学の「ジュビロ飯」は大学入試広報として多数の掲載機会があった。

表2　ジュビロ飯に関係するプレスリリースの例

タイトル等	掲載日	掲載メディア
スポーツ推進に尽力　磐田市が委員に委託状	2021.04.25	静岡新聞（朝刊018ページ）
しずおか教育　教室から　健康づくり市民と共に　スポーツ科学部	2021.05.21	読売新聞（朝刊024ページ）
ザースポールで体育指導力向上　袋井若手教員向け研修	2021.06.23	静岡新聞（朝刊018ページ）
スポーツ分野学問学ぶ　磐田・静岡産業大で静岡西高生　座学やグループワークで	2021.06.24	静岡新聞（朝刊020ページ）
SDGs理解へ冊子	2021.07.20	静岡新聞（朝刊021ページ）
新聞紙の動きまね　全身自由に動かす	2021.07.20	静岡新聞（朝刊020ページ）
静岡産業大３講義配信　スポーツ科学部開設記念	2021.08.26	静岡新聞（朝刊022ページ）
J2磐田、市、大学など連携　ジュビロ飯で市民生き生き　献立開発や運動プログラム	2021.10.29	静岡新聞（朝刊023ページ）静岡新聞（朝刊001ページ）紙面から
静岡・磐田市に貢献「ジュビロ飯」できた！	2021.10.29	スポーツ報知（YAHOOニュース）
磐田市とジュビロ磐田、市内2大学などが連携「ジュビロ飯」できた	2021.10.29	日刊スポーツ（YAHOOニュース）
ジュビロ飯で市民生き生き　J2磐田、市、大学など連携　メニュー開発や運動プログラム	2021.10.29	静岡新聞（YAHOOニュース）
「ジュビロ飯」で目指せ健幸　J2磐田・市・大学などが新事業/「ジュビロ飯」で健康目指そう	2021.11.08	朝日新聞（025ページ）朝日DIGITAL（YAHOOニュース）
風紋「ジュビロ飯」開始　資源生かし経済活性を	2021.11.10	静岡新聞（朝刊018ページ）
ジュビロ飯健幸プロジェクト	2021.11.11	SSU NEWS（information）
健幸プロジェクト「ジュビロ飯」スタート	2021.11.16	広報いわた令和3年11月号
市内産野菜使った「ジュビロ飯」販売　あす磐田	2021.12.04	読売新聞（朝刊024ページ）
スポーツのまちテーマにシンポ　磐田市参加者募集（髙橋和子先生）	2022.02.09	静岡新聞（朝刊023ページ）
魅力伸ばし相乗効果を　磐田市「スポーツのまち」全国1位　サッカーやラグビー、大学シンポで連携	2022.02.24	静岡新聞（朝刊017ページ）
ジュビロ飯提供進む　磐田市など健康向上、経済活性化へ	2022.03.12	静岡新聞（朝刊019ページ）
スポーツ、健康課題にアイディア　静産大生が磐田市に提案　市役所でプレゼン	2022.03.14	磐田市役所（hp）
西部記者コラム風紋　スポーツのまち磐田の転換点　資産生かし新機軸戦略を	2022.03.16	静岡新聞（朝刊019ページ）
スポーツ、健康課題にアイディア　静産大生が磐田市に提案　市役所でプレゼン	2022.03.21	静岡新聞（朝刊019ページ）
ジュビロ飯　ランチョンシート	2022.04.18	静岡産業大学
スポーツのまち磐田PRジュビロ飯、静産大生が新メニュー	2022.04.20	静岡新聞（朝刊021ページ）
静岡産業大学ジュビロ飯お披露目会	2022.04.26	ジュビロ磐田（シャレンweb）
特集名物教授　髙橋和子　スポーツへの興味関心がスポーツ科学部への入口	2022.05.10	大學新聞（第203号03ページ）
特集２　磐田キャンパスの食堂で「ジュビロ飯」プロジェクトがはじまりました	2022.05.15	SSU NEWS 2022-05-vol.35
静岡産業大学ジュビロ飯メニュー　イワタノゴハン：ピンポン入りラグビーつくね	2022.05.20	広報いわた令和4年5月号
健幸プロジェクトジュビロ飯　産官学連携	2022.05.25	静岡産業大学（大学案内2023パンフレット）
静岡産業大学スポーツ科学部	2022.06.24	日経MOOK（2023年版92-93ページ）

＊静岡産業大学が関係したものを中心に取り上げた

IV 結論

本研究では、磐田市の健幸プロジェクト「ジュビロ飯」誕生までの経緯と波及効果について、次のことが明らかになった。

1. 健幸プロジェクト「ジュビロ飯」は、2020年から1年かけて検討を重ね、「ジュビロ飯」を誕生させた。誕生の社会的背景は、健康寿命の延伸を「食・スポーツ」で推進させたい願いが、商工会議所・ジュビロ磐田・磐田市・2大学で一致したことにある。これにより、地域社会に「ジュビロ飯」を発信できた社会的意義はあったと言える。
2. 本プロジェクトにより、磐田市初の産官学協働での「食とスポーツ」による地域の健康向上とコロナ禍における経済活性化ができ、「ジュビロ飯」の展開先拡大と地産地消による地域の食材消費に繋がった。
3. 「ジュビロ飯」を食べる前にスクワット等の運動の実施、ベジファーストの習慣化の推奨等により、運動と食教育を推進できた。しかし、フレイル予防やスポーツ実施率向上の検証はできていない。
4. 持続可能なSDGsの活動ができた。その背景には、PDCAサイクルを意図せず、各団体ができる範囲で「主体的に対話的」に活動を展開したことが考えられる。事業費予算ゼロも、同様の取組を普及する上でのロールモデルになると考えられる。
5. 本プロジェクトに関わったことにより、静岡産業大学では入試広報のブランディングとして機能したばかりでなく、学生の卒論のテーマや教員の研究領域やネットワークを広げることにも寄与した。このことは各団体においても同様の効果があったと考えられる。
6. 情報発信（新聞報道、磐田市・ジュビロ磐田・静岡産業大学のHPやSNS）により、他団体や市民への認知や啓発に繋がった。

謝辞

研究に協力いただいた磐田市、静岡産業大学、静岡県立農林環境専門職大学、ジュビロ磐田、磐田商工会議所に感謝します。

註

1)「健幸」とは健康は幸せの源であり、生涯を通じて健康かつ生きがいを持ち豊かで幸せな生活を営んでいる状態、という考え方による造語。

2）21のうち11事例（岩手県遠野市、栃木県大田原市、東京都清瀬市、神奈川県相模原市、新潟県見附市、三重県伊勢市、大阪府高石市、大阪府阪南市、兵庫県川西市、岡山県岡山市、鹿児島県指宿市）は、磐田市と同様「健幸」を冠した実践である。

3)「スポーツによる地方創生、まちづくり」は、武道やアウトドアスポーツ等のスポーツツーリズムの更なる推進など、スポーツによる地方創生、まちづくりの創出の全国での加速度等をあげている。特に、スポーツ・健康まちづくりに取り組む地方団体の割合を15.6%から40%にする目標が設定され、その為の「スポーツによる地域活性化・まちづくりコンテンツ創出等総合推進事業」予算額は2億円（2021年度は164,927千円）が計上されている。

4）文部科学省が大学の役割として「社会貢献（産学官連携等）」を明文化したのは、2006年の「教育基本法」改正である。その後、民間企業と大学の共同研究は、2015年度には20,821件、2019年度には29,282件と増加した。（文部科学省2021年「大学等における産学連携等実施状況について」）

V 引用・参考文献

1. 磐田市健康福祉部健康増進課 . 健幸いわた 21.2018.
2. 磐田市スポーツ振興課 . 磐田市スポーツ推進計画（中間見直し）概要版 .2021.
3. 静岡新聞 .2021.6.6. 朝刊 8 頁
4. （公財）山梨総合研究所 . 山梨は健康寿命がなぜ長いのか .2018:236-2
5. スポーツ庁健康スポーツ課 . スポーツによる地域活性化推進事業取組事例 .2017https://www.mext.go.jp/sports/content/1399231_1.pdf
6. スポーツ庁 . 第 3 期スポーツ基本計画 .2022. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm
7. 厚生労働省 . アクティブガイド 2013. https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/exercise/s-01-002.html
8. ふじさわプラス・テン -KEIOSPORTS. https://sportssdgs.keio.ac.jp/plusten/
9. 国立研究開発法人科学技術振興機構 . 産学官連携ジャーナル .2002:18-4
10. 大林徹也 . 文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域振興課 . 第 29 回地域を活かす科学技術政策研修会資料 .2022.
11. 広報いわた.イワタノゴハン.SSUジュビロ飯.2022.5月号. https://www.city.iwata.shizuoka.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/010/922/01_2205_koho_iwata_PDF/p30.pdf
12. Jリーグ「シャレン」.2022. https://www.jleague.jp/sharen/news/2807/
13. 樋口耕一 . 社会調査のための計算テキスト分析 . ナカニシヤ出版 .2015.

抄録

本研究は、健幸プロジェクトの産物である「ジュビロ飯」が誕生した経緯と波及効果について明らかにすることを目的とした。健幸プロジェクトは、磐田市、静岡産業大学、静岡県立農林環境専門職大学、ジュビロ磐田、磐田商工会議所、市内企業との産官学協働により、食とスポーツによる地域住民の健康向上と地域経済活性化を目指した。2020 年から 1 年かけて討議を重ね「ジュビロ飯」を誕生させた。研究方法として、プロジェクト会議資料整理や関係者への半構造面接を行った。その結果、次のことが明らかになった。

①「ジュビロ飯」を発信できた社会的意義。②地域の健康向上と地域経済活性化。③運動と食教育の推進。④持続可能な活動のロールモデル提示。⑤大学のブランディングや学生・教員の研究推進。⑥情報発信による市民への啓発。

以上のことにより、磐田市が「スポーツのまち」イメージ日本一になったことが追い風になり、「ジュビロ飯」は市内に定着すると共に、様々な広がりをもって拡散したことが明らかになった。